

# じんわりとした読後感か、痛快な爽快感か。どちらもお薦め

短篇集と長篇を同日に刊行した金城一紀さん。「フライ・ダディ・フライ」は軽快なテンポで一気に読めるエンターテインメント性の高い作品。一方、著者本人が装丁したシンプルで静謐なたたずまいをみせる「対話篇」は、しみじみと心にしみわたる読後感を持つ短篇集だ。

「書き下ろしと短篇集を同じ時期に出すのだったら、変わったことをやってみたい」と今回の企画は、金城さん本人が考えたことだという。「言葉遊び」ではいろいろ仕掛けていますが、書籍ではまだ誰もやっていない。本が売れないと言われるなかで、話題の一つにでもなれば」と

さまざまな立場の男と男が対話を重ねる短篇集「対話篇」ほどの作品も味わい深く、ゆつくりと人生の意味を考えさせられる。金城さんの新たな一面にうならせられたファンも多いはず。「登場する病院を同じ場所に設定するなど、深く読んだ人が、あれ？と気づくような仕掛けを入れてい

ます。自分自身送り手が細かく意識したところまで気づきたい、と深読みするのが好きなので愛読。一度目はたぶん読んで涙してしまいうので、再読するのがお薦めだ。

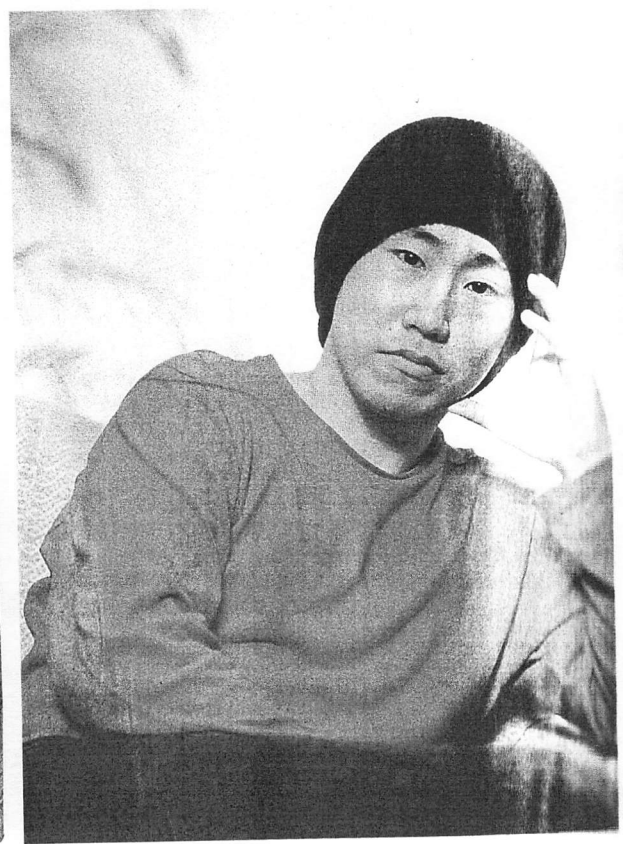
一方「ページターナーになりたい」という金城さんの魅力にあふれているのが「フライ・ダディ・フライ」。47歳の平凡なサラリーマン鈴木さんがある事件を契機に、愛する家庭を守るために高校ボクシング界のチャンピオンに挑戦するまでをコミカルに描く。最初はひ弱だった彼が、鍛えて筋肉をつけていく描写はリアルで、息遣いまで聞こえてくる。

「筋肉の痛みや汗を感じる小説を書きたかった。僕の中では身体性、動きだけの世界に対する憧れがあります。体をコントロールしたいし、走れなくなったらおしまいだ、と思う。トレーニングを欠かさず、一日に15kmを走るというから本格的だ。体を鍛えてからは、小説を書くのにも粘りが出てきたという。

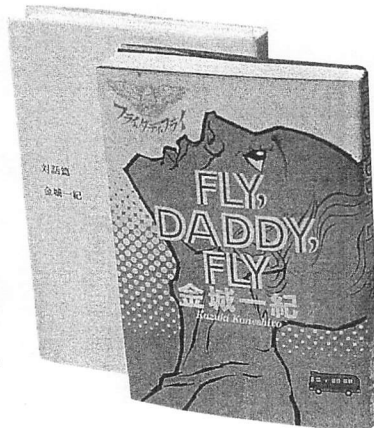


## タンノイのエジンバラ

●文藝春秋/1333円(税別)  
02年12月10日発売。失業中の「俺」は、ある日隣の部屋に住む女の子を1日預かることになった…。年の離れた二人の交流を描いた表題作のほか、三人姉弟と、再婚した父の義理の母親との確執を、重いテーマながら著者らしく印象的なシーンを重ねて綴った「夜のあぐら」など、4作品が収録されている



「日常とは大変なものだから、読んで日常からぼーんと飛ばされるような、遠心力を持った小説を書きたい。自分もそうして読書に救われたから、という金城さんは映画「フライ・ダディ・フライ」で脚本を担当する。「実は脚本を先に書いたんです。だからこの本が映画のノベライゼーションになるのかも。両方とも楽しんでください」



## 対話篇

●講談社/1400円(税別)  
03年01月31日発売。「いつ死んでもいい」と思う「僕」と、別れた妻との記憶を取り戻そうとする老弁護士との奇妙な道行きを描いた「花」など、他人と語り合うことで生きる勇気を取り戻し、人生の意味を掘り下げる作品集

## FLY, DADDY, FLY

●講談社/1180円(税別)  
03年01月31日発売。新宿のおチョコレ男子高に通うゾンビーズが活躍する「レヴォリューションNo.3」の続編。家族を守る父親の誇りを取り戻すため、ボクシングの高校生王者相手に無謀な復讐を決意する平凡なサラリーマン・鈴木さんのために、ゾンビーズの面々が立ち上がった

# 金城一紀さん

●かねしろ・かずき 1968年、埼玉県生まれ。98年に、短篇「レヴォリューションNo.3」で第66回小説現代新人賞を受賞して作家デビュー。00年に発表した自伝的長編小説「GO」は第123回直木賞を受賞し、映画化もされた。その他の著書に短篇集「レヴォリューションNo.3」がある

### お薦めの本



『民主と愛国 戦後日本のナショナリズムと公共性』  
小熊英二著  
●新曜社/6300円(税別)  
「堅い人文科学の本なのに、感動できる。難しい題材をエンターテインメントに仕上げていて稀有な本なので、ぜひ読んでほしいです」



『プラネテス』  
幸村 誠著  
●講談社/648円(税別)  
「宇宙飛行士の話なのに、とても深い孤独と深い愛が感じられます。しみじみと感動できます」